

聖書：ローマ 3：1～8

説教題：神の真実とユダヤ人

日時：2015年5月17日

ここでパウロが取り上げているのは、ユダヤ人の反論です。前の2章ではユダヤ人も神のさばきの下にあるということが語られました。彼らはモーセ律法を持ち、割礼を与えられた国民だからさばかれないというわけではないということでした。パウロは2章28～29節でこう言いました。「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。」すなわち民族的なユダヤ人であることが、必ずしも真のユダヤ人であることを保証しない。肉体に割礼がなくても、心の割礼を持っている人もいる。言い換えれば異邦人の中にも、神の前での真のユダヤ人、心に割礼がある人と認められる人がいるということでした。

とするとユダヤ人たちは黙っていないでしょう。パウロに次のような議論を吹っ掛けて来るに違いありません。「パウロよ。おまえはユダヤ人と異邦人に何の違いもないと言うつもりか。ユダヤ人にすぐれている点はないと言うのか。旧約において神がイスラエルを導いて来られた歴史を、おまえは全部無駄だったと言うのか。」この問いから始まって、合計4つの問いと4つの答えがここで展開されます。

第一の問いは1節：「では、ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。割礼にどんな益があるのですか。」これに対してパウロは、それは大いにあります！と言います。パウロは決してユダヤ人であることや、割礼の儀式に意味がないとは言っていない。パウロはただ、これらを持っていれば神にさばかれることはないという見方に対して、それはノーだと言っただけです。ユダヤ人は何と言っても神が起こした国民です。また割礼は神が定めた儀式です。ではどんな意味があるのか。パウロは、第一に「彼らは神のいろいろなおことばをゆだねられています。」と言います。すなわちユダヤ人は神の御言葉をまず先に与えられた人たちである。一言で言えば旧約聖書全体です。これらはまずユダヤ人にもたらされました。これは明らかに彼らにとっての特権であり、祝福です。しかしです。このような特権を与えられたからと言って、彼らがどうあっても救われるというのではない。むしろここで強調されているのは、「ゆだねられている」という彼らの責任です。ユダヤ人はこれを全世界にあかしし、

携え行くという使命のもとに御言葉が与えられました。ですからまず自分たちがこの神の御言葉に生き、その生き様と言葉をもって、まことの神を宣べ伝える光栄な使命に生き抜くべきなのです。

2つ目の問いは3節：「では、いったいどうなのですか。彼らのうちに不真実な者があつたら、その不真実によって、神の真実が無に帰することになるでしょうか。」パウロは2章でユダヤ人の中に不真実な者があると示しました。その者はそのままではさばかれるということ述べてました。しかし特権を受けたユダヤ人がそのように救われなかったらどうなるのか。彼らを救うと言って来た神は真実でないことになるのではないか。ユダヤ人の不真実によって神の真実も無に帰するのか。パウロは4節で「神の真実が無に帰するは絶対はない！」と言います。たといすべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです、と。そして詩篇51篇4節を引用します。この詩篇をご存知の通り、ダビデの有名な悔い改めの詩篇の一つで、バテ・シェバとの罪を悔い改めた時の詩篇です。詩篇51篇4節：「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。」大切な点はダビデは自分がさばかれた時に、神に向かって「あなたは正しい」と告白したことです。ネヘミヤ記9章33節：「私たちにふりかかって来たすべてのことにおいて、あなたは正しかったのです。あなたは誠実をもって行われたのに、私たちは悪を行なったのです。」聖書を良く読めば、神はあなたがたがどう歩んでもわたしは絶対救うとまでは約束していません。神はご自身により頼む者を救うと約束しておられますが、一方でご自身に従わない者にはさばきを下すという否定面についても語って来られました。ですから神の御心に沿って歩まない者にさばきを下すことにおいても神は真実であられるのです。そのことにおいても神はきよく、正しいのです。

するとユダヤ人はまた反論します。3つ目は5節：「しかし、もし私たちの不義が神の義を明らかにするとしたら、どうなるでしょうか。人間的な言い方をしますが、怒りを下す神は不正なのでしょうか。」この反論はほとんど屁理屈に近いものです。彼らの言い分はこういうことです。もし我々が悪を行ない、それでさばかれて、神の真実や正しさが輝き現れるなら、神が我々をさばくのは正しくない。なぜなら我々のおかげで神の素晴らしさが引き立っているのに、その我々をさばくなんて、神はいいとこどりし過ぎではないか。それは公正さを欠く！というものです。まさに開き直った屁理屈です。パウロはここで「人間的な言い方をしますが」と断りをつけていますが、

それはこうでも言わなければとても彼の口からは出せないような冒瀆的な言葉だからです。あえて彼は相手の立場に立って、この言葉を発したのです。

それに対してパウロは答えます。6 節：「絶対にそんなことはありません。もしそうだとしたら、神はいったいどのように世をさばかれるのでしょうか。」 ユダヤ人の論理に従えば、神は誰をもさばけないことになってしまいます。しかし 1 章で異邦人たちへのさばきが語られた時、ユダヤ人たちは「アーメン！」と喜んだはず。そこに矛盾が生じます。第一、神を誰をもさばけない方とすること自体が間違いです。神は善悪の絶対基準を持つ主権者であって、悪をさばく方であってこそ神です。それを否定したら、その方は神ではありません。

しかしユダヤ人はなお食い下がります。7 節：「でも、私の偽りによって、神の真理がますます明らかにされて神の栄光となるのであれば、なぜ私がなお罪人としてさばかれるのでしょうか。」 これは前の 3 つ目の問いとほぼ同じです。しかしこちらではよりパーソナルな問いとなっています。私の悪の結果、神の真理が現わされ、神の栄光へとつながるなら、どうしてそのために協力した私がさばかれるのか。神は私のおかげで栄光を現わせるのだから、私をさばくなんてとんでもないことではないか。さらには 8 節に「善を現わすために、悪をしようではないか」と言っただけではないのでしょうか、とまで言われます。我々の悪によって、一層神の善が示されるなら、我々は神の栄光のためにもっと悪を行なおう！と言っただけでもないのではないか、という主張です。パウロは自分たちはこの点でそしられると言っています。パウロはこういうメッセージを伝えている！とある人たちからは中傷されていました。この後、ローマ書でも見ますように、パウロが伝えていた福音とは、救いは人間の良い行ないによらず、ただキリストを信じる信仰によるというものでした。しかし律法を守ることによって救われようとする律法主義的ユダヤ人たちからすれば、これは面白くない。そこで彼らはパウロを中傷したのです。パウロは良い行ないはいらないと言っている！むしろ神の栄光が現わされるために悪にとどまろう！悪を行ない続けよう！とさえ言っている、と。しかしもちろん、後に述べられるように、それは真実ではありません。パウロはここではそのことに詳しく反論していません。ただ、このように論じる者どもは当然罪に定められるのですと宣告するだけです。普通に考えても、神の栄光のために悪を行なおうなどといった主張がおかしいことは明白です。取り上げるにも値しません。そこで、そのように論じる者は当然さばかれると述べて終わりとしているのです。

以上の箇所から私たちは何を学んだら良いのでしょうか。まず改めて教えられること

は新約聖書においても、やはりユダヤ人の特権は認められているということです。ユダヤ人は神の選びの民です。異邦人と比べて神の恵みに優先してあずかって来た者たちです。神がそのように計画し、実行されました。旧約と新約に矛盾はありません。しかしだからと言って、ユダヤ人はさばきの日に異邦人に比べて有利なのではないのです。2章後半で見ましたように、神は私たちの外側ではなく、内側を見ておられます。ですからユダヤ人は与えられた外的な特権に満足して高ぶるのではなく、自分の内側こそを神の光の前で点検しなければなりません。そのことを正しく行なうなら、自分はとても神の前に良しと認められるような者でないことを認めざるを得ないはず。救いようのない、あわれな者であることにうめかざるを得ないはず。それこそが神が律法をイスラエルに与えた第一の目的です。そして彼らは神が用意してくださったキリストにある救いへと導かれるべきであった。次回の9節では「ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にある」と言われます。これを見てユダヤ人は、オレたちはギリシヤ人とは違うと言ってはならないのです。特権は頂いていますが、人間として自分たちも同じ罪人です。そんな者たちに神は救い主キリストを送ってくださった。ユダヤ人たちは先に律法を受け取った者たちとして、先にキリストへの信仰へと導かれて、続く異邦人たちへの良き模範となるべきだったのです。

また今日の箇所は今日の私たちにも大切なメッセージを語っているでしょう。私たちは今やイエス・キリストを信じて神の民とさせられましたが、このような特権にすでにあずかったという点で、ユダヤ人と同じ誤りに陥る可能性があります。すなわち私はもう神の民である。だからこの私が救われないということはない。もし私が救われなかったら神は真実でないことになる。聖書にも、私たちは真実でなくても神は真実だというメッセージがある。だから私が少々不真実に歩んでも問題はない。むしろこんな罪人を救ってくださるところに神の素晴らしさが現れるのだから、そのまま良いのではないか。むしろ神の恵みがさらに誉めたたえられるために、なお罪を犯しても構わないのではないか、と。そのように偽りの安心感を抱いて、罪に無頓着な生活をする可能性があります。そんな私たちに対して、今日の箇所は警告を発しています。すなわち神はあなたをさばくことによってご自身の真実を現わすこともできるということです。神の真実とは、究極的に言えば、私たちに対する真実と言うよりは、ご自身に対する真実です。あるいはご自身の御言葉、約束に対する真実です。神はご自身に信頼する者を救うと約束する一方、ご自身に従わない者はさばくと言って来られました。ですから私たちが神に従わないためにさばかれたとしても、そのことにお

いても神の真実が高らかに示されるのです。であるなら大変です。私たちは急いで自分を点検しなければなりません。私たちはどちらの道を進んでいる者なのか。神の御言葉に良く聞いて、自らの罪を悟り、神が与えてくださった救い主を信じて救われる道を歩むのか。それとも外的な特権に満足して、神の御言葉には本当の意味では耳を傾けず、私は不真実でも神は真実だなどとうそぶいて罪の生活を肯定し、やがてさばかれる者となるのか。願わくは私たちが良い意味で神の真実がこの身に示される器であることができますように。そのための道は、神の律法の前で自分を真摯に点検すること。誤ったプライドの上に立ったり、屁理屈を並べるのではなく、心を見ておられる神の前でさばきの日に本当に大丈夫かどうかを考え、自らの貧しさを正直に告白すること。そしてそんな者に神が与えてくださる救い主キリストに心から感謝しておすがりすること。このキリストにある救いを心から感謝して受け取る人は、「善を現わすために悪を行なおう」とは言わない。地上にある限り、完全にはなり得ませんが、それでも「幾らかでも自分のできる善をもって神の栄光を現わそう」と導かれる。そしてその歩みをキリストが助け導いてくださいます。そういう者に、キリストにあって救うという神の真実が豊かに現わされるのです。